

音楽 宗教 人物伝

- 4 -

福本 康之

坊田 壽眞 (1902 ~ 1942)

Bouta Kazuma

ピアノ伴奏付きの童謡を子ども
の成長、年齢にあわせ創作

音楽性豊かな子ども の宗教讃歌めぐす

18歳のとき小学校の教員となり音楽家としての人生を歩み出します。作曲家としての本格的な活動は、彼が19歳であった大正10年、当時童謡運動（赤い鳥運動）を牽引していた雑誌「赤い鳥」に作品が採用されたことに始まります。以降坊田は、時には教育者として現場で、時には童謡作曲家として創作にと、二足のわらじを履いて、生涯を子どもの音楽に捧げることになりました。

えた新しい作品が子どもには必要だ、ということを創作にあたっての信念としていました。ピアノ伴奏付きの童謡は、その成果の一つです。さらに、子どもの成長に合わせ、その年齢を考慮した作品を書きました。

そんな坊田を評価していた人物が、作曲の師でもあり、すでに宗教讃歌の創作に携わり、本願寺派と関わりがあった藤井清水でした。おそらく本願寺派と坊田の縁は、藤井によるものでしょう。

た。特に、赤い鳥運動の理念に共感し、豊かな音楽性を備

坊田は昭和17年に39歳で亡くなりましたが、わずか数年の間に、《親鸞さま》をはじめ約100曲の子ども向け宗教讃歌を発表しています。今日、坊田の名を知る人は決して多くないですが、質の高い宗教讃歌作品を提供したその活躍は、まさに野村成仁を継ぐものとして評価されるものです。（本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室長）

昭和10年代前半、本願寺から3冊の仏教童謡曲集が出版されました。

収録された作品は、大正時代より「讃仏歌」の名で発表されてきた子ども向けの仏教讃歌とは趣を異にしています。なかでも大きな特徴となっているのが、オリジナルのピアノ伴奏を有する点です。ちょうど藤井清水（6月20日号）が、すでに発表されていた単旋律の仏教讃歌作品に伴

奏を付けていたところで、そうした時代の要請が、当時の宗教讃歌を取り巻くひとつの流れのなかにあったといっています。野村成仁（4月20日号）が日曜学校向けの讃仏歌を発表し始めてから、すでに約四半世紀後のことです。

このとき、3冊すべての作品（約40点）で、作曲を担当した人物が、坊田壽眞でした。明治35年、広島県の本庄村（現・熊野町）に生まれた坊田は、



坊田は保育教材として本願寺派の仏教保育研究会から3冊の宗教童謡曲集を発表。第1輯「夢笛」には振り付けも掲載されている